ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

　合宿の最初のメニューは、マルチバトルだ。来夢音と白の実力を見るためらしい。

　二人の実力は雅也の方から田島辰巳の方に伝えてあるのだが、辰巳はそれでも、二人がどのように戦うのかは見ておきたかった。伝聞の情報と、弟子が合宿に参加することを許したくらいなので、それなりの実力はあると踏んではいるのだが、それでもだ。友達補正が掛かっていないとも限らない。最悪、二人にはレベルを落とした別メニューをこなしてもらうことも、田島辰巳は頭の片隅に置いていた。

　とはいえ、そうはならないだろうという確信が辰巳にはあったのだが。マルチバトルには、別の意図もある。

　バトルするのは、拓馬と良助のペア対、来夢音と白のペアである。使用ポケモンは一人二匹。

　毎日修行しているとはいえ、拓馬も良助も不安そうな顔を浮かべているのが雅也には分かった。二人共、マルチバトルは初めてなのだ。というか、きちんとしたダブルバトルをした経験すら無い。太一や神楽とバトルすることはあっても、いつもシングルバトルだからである。学校の体育の授業でのバトルも、ダブル・マルチバトルはまだやらない。

言ってしまえば、味方に気を配りつつ行動の指示を出すことに慣れていないのだ。

　一方、来夢音と白の方は表情に余裕が見て取れる。学校でバトルする時は、結構な頻度でマルチバトルになるので、どういう風に動けばいいのか、コツを知っているからだろう。

　ちなみに雅也と奈央は見学だ。奈央は言わずもがな、雅也は変則的とはいえ太一とマルチバトルの経験があるし、学校でも太一や神楽と組むことがあるからである。

「それじゃあ、四人とも。準備はいいか？」

　審判の田島辰巳が尋ねると、拓馬達は頷いた。

　そして、一斉にボールを投げる。

「行け！　エアームド！」

「エテボース！」

「がんばってぇ！　ドラピオン！」

「お願いします！　プララ！」

　拓馬の出したポケモンはエアームド。今も昔も変わらない、拓馬の先発エースである。

　良助の出したポケモンは、紫色の、尻尾が手のようになっているポケモンだ。どこかエイパムの面影があるが、尻尾は一本から二本に増えている。それに、体格もエイパムより大分大きい。それもそのはずで、エテボースはエイパムの進化系だからである。進化したのは、丁度雅也が真夜中に神楽と戦った日の一週間後だった。

　来夢音が出した紫色のポケモンは、首の長い、全体的に蠍の面影のある、巨大なポケモンである。『ばけさそりポケモン』、ドラピオン。特徴的なのは、両腕と尻尾の銀色の鋏だろう。お嬢様が使うにしては、少々強面ではあるものの、彼女のエースと言っても過言では無い。まあ元々、来夢音を心配した一氏が護衛のポケモンとして持たせたポケモンだからだ。昨日雅也が戦ったオーロットくらいのレベルであれば、二、三匹纏めて襲いかかってきても、ちゃんと撃退できるくらいの能力は備えている。

　白の出したポケモンは、ドラピオンとは対照的に、ちっちゃくて可愛いポケモンである。大きさはピカチュウと同じくらいで、色等の見た目も似ている。まあ、ピカチュウは鼠寄りの外見で、こっちは兎に近い外見であろうか。頬っぺたには『＋』のマークがついていて、尻尾にも赤い『＋』がついていた。『おうえんポケモン』、プラスルだ。『プララ』というのは、白がプラスルにつけたニックネームである。

　余談だが、今時ポケモンにニックネームをつけるポケモントレーナーは珍しい。一昔前は流行っていたのだが、今は皆たいてい、自分のポケモンは例えば『ピカチュウ』なら『ピカチュウ』と呼ぶ。

ただ白は、子供の頃から一緒にお嬢様のために頑張ってきたポケモン、だそうなので、敢えて親しみを込めてニックネームで呼んでいるらしい。ただ、手持ちのポケモン全員にニックネームをつけている訳では無いようだ。ニックネームで呼んでいるのは、プラスルと後もう一匹だけである。

「エアームド、ドリル嘴！」

「プララ、電磁波で受け止めてください！」

　最初に動いたのは、この二匹だ。だが、空中からドラピオン目掛けて回転しながら急降下したエアームドは、あっさりと壁のような『何か』に弾き返される。

何とか空中で体勢を整えたエアームドが何事かと見ると、そこには薄らと黄色いバリアのようなものがあった。おそらく、プララの手から放たれた電流が作った盾らしい。

電磁波は本来は相手のポケモンを麻痺させるための技なのだが、なるほど……とエアームドと拓馬は思う。電流を上手く操ると、こんなことも出来るのかと感心していた。同じ電気タイプで、見た目は似ていても、雅也のピカチュウとは戦い方は全然違って見えたのだ。

「良助、プラスルの方をお願い！」

「あ、ああ！　エテボース！」

　二匹の攻防をジーッと眺めていた良助は、慌てて叫ぶ。エテボースはプララの方へと走っていった。

　だが、エテボースとプララの間に、右方向からドラピオンが割り込む。

「白のプララの邪魔をするなら、私のドラピオンが相手になるわ！」

「なら、まずはそっちからだ！　エテボース、アイアンテール！」

「ドラピオン、シザークロス！」

　銀色に光る尻尾と、濃緑色に光る二本の鋏が繰り出される。

　だが、二匹の目線はそれぞれ全く違うところに注視されていた。ドラピオンの目は攻撃の向かう先である、エテボースのお腹に。それに対し、エテボースはドラピオンが攻撃を繰り出す腕だ。

　このままなら、そして二匹の攻撃のスピードは、圧倒的にエテボースの方が早い。

　勝った、とエテボースと良助は確信する。このままなら、相手の攻撃を防ぎつつ隙を作れると思ったからだ。

　しかし、銀色に光る尻尾の一撃は、ドラピオンに命中するその手前で阻まれる。そこには、さっきの『電磁波で作られた盾』があった。

　そして、大きく弾かれた尻尾に体勢を持って行かれたエテボースの隙を、ドラピオンの一撃は見逃さない。ガラ空きになった腹に、両腕をクロスするような形で振られた鋏が決まった。

「なっ……ちょ、拓馬っ？」

「え……あれっ？」

　エテボースが攻撃されたことに今気がついたらしい拓馬は、顔を引き攣らせる。エアームドは、まるで攻撃の隙を見つけようとしているが如く空中を旋回していた。今の今まで、拓馬と

エアームドはプララに攻撃していたのだ。一向に反撃されないので、珍しく自分からどんどん攻撃を仕掛けていた拓馬達だったのだが、そういえばさっきプラスルの手が何か動いた気がする、と思い出す。

　どうやら、プララはエアームドの攻撃を防ぎつつ、ドラピオンに向けられたエテボースの攻撃も防いだらしい。

　そして、良助もハッとする。そういえばドラピオンはエテボースの攻撃を見ていなかったことを思い出したのだ。

　シングルバトルなら、相手の攻撃を見ないのはただの自殺行為に等しいのだが……これが、もし白のプララが攻撃を防いでくれるという確信があった上での行動なら。

　拓馬と良助は、互いに顔を見合わせる。

　マルチバトルはまだ始まったばかりだ。